

越路の旅愁

——『おくのほそ道』随想——

松隈義勇

酒田の海の真赤な夕陽と、越後の出雲崎の藻の打ち寄せられる浜辺の黄昏と、同じく筒石・能生などという海にへばりついたような漁村のたたずまいや、親不知・市振辺りの寂しさと、私にとって旅愁のしみついた思い出の土地というところ、どういふものか日本海沿岸に集まっている。

芭蕉の『おくのほそ道』を読むと、やはり越路（越後路、北陸路の総称）のくだりに旅愁がこもっているように思われる。旅愁ということばには青臭い語感を感じるが、げんに芭蕉の文中に見られる用語なのである。出雲崎での体験を基に綴った「銀河ノ序」という文章の中に、「暫時の旅愁をいたはらむとするほど、（中略）たましひけづるがごとく、腸ちぎれて、そとろにかなしびきたれば、草の枕も定まらず」と

いう風に書いている。次に金沢の近くで詠んだ「あか／＼と日は難面もあきの風」の句の前書の中の詞句にも「旅愁なぐさめ兼て」というように見える。

これらの文を見ると、芭蕉は折柄の、ものあわれを催させる秋の訪れと取り合せで、旅愁の思いを強く打出そうという意図を抱いていたように思われる。『おくのほそ道』の越路の部分が旅愁の濃くこもった文や句で構成されていることも同一発想によるのだろう。

越路のくだりは、その部分の序として、酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。

という、或いは『ほそ道』中一番旅情・旅愁の強いといえそうな、情感的な文章で書

き始められる。その後には書かれる越後路の事は「鼠の関をこゆれば越後の地に歩行を改めて、越中の国一ぶりの関に到る。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」と、わざと逃げたような簡単な叙述で片付けてある。代って、次の二句が前書もなく、ずかりと投げ出すように置かれている。

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天河

どちらが先に作られたか論議もあるが、要するに、前の句は七夕前夜を、後の句は七夕当夜を詠んだもの。前句は二星相会を前にして、色めきたつような気配の中に、望郷・旅愁の心をほめかしている。後句は出雲崎での体験をうたったもので、悲寥寂寞の景の中に、流人を偲び家郷を懐く漂泊の孤情を融かし込んで、満腔の旅愁をうたい上げた作品である。前に触れた「銀河ノ序」はこの句の序として書かれたものであり、それはこの句の主意が旅愁であることを語っている。この一句をもつてすれば越後路の旅愁は表わし切れた、地の文は蛇足であると、芭蕉は考えたのであろうか。

「荒海や」の句が余韻を引く中、越後路の最果ての寒駅、市振を舞台にして哀艶な遊女とのめぐりあいの話が物語られる。旅愁の色濃い叙述の流れの中なので、人間の世界の哀れも一入身に泌みる。この話は虚構かといわれるが、それなら、これは旅愁が芭蕉の言語世界に生み出した幻だろうか。

金沢に入る前「くろべ四十八か瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。云々」という文章がある。感覚の鋭い人ならここにも匂うような旅情を感じ取ることができらるだろう。

金沢で会うことを楽しみにしていた一笑の死を嘆いて手向けた句は、

塚も動け我泣声は秋の風

ここにおける秋風は慟哭の声となつて、旅愁こめる北陸の天地を吹き渡つた。これから後に秋風の句がいくつか出ている。その一つ、「途中陰」と前書した

あか／＼と日は難面もあきの風

は、旅愁を前面に押し出した詠。「旅愁なぐさめ兼て、ものうき秋もやゝいたりぬれば、さすがにめにみえぬ風の音づれもいとどかなしげなるに、残暑猶やまさりければ」と

いう前書を付した真蹟があり、句意はつかまれる。「あか／＼と」は明々と、赤々と両義を兼ねる感じた。「難面も」は素知らぬ顔に、無慈悲にの意。「も」は詠嘆と取りたいが、逆接の働きもしているようにも思われる。季節の哀感と旅の哀感とが融け合った、心にしみる句だ。

小松での句「しほらしき名や小松吹萩すゝき」。吹く秋風はやさしいが哀しくひそやかな旅愁が匂う。斎藤盛を悼んだ「むざんやな甲の下のきりぎりす」は、こおろぎの哀音に、秋風に代る秋の声を聞いたのである。小松の南方の那谷寺に参つたのは山中で曾良と別れた後である。(本文では逆にさ

れている。)

石山の石より白し秋の風

古来秋に白を配するが、そのことより、これは直下の感受である。曾良との別離を胸に畳んで詠つた那谷寺。石から成る白い淨域に吹く白い秋風は、清浄と悲しみの象徴である。仏をまつた人の心奥にある悲しみの深さは言語を絶した所にある。旅の悲しみもここに極まったと芭蕉は言いたいのだろうか。この句は古注では多く近江

の石山寺の石よりも那谷寺の石の方が白いという意味に解されて、那谷寺の清浄さを強調した句とされてきた。裏にはそれも潜められていよう。だが私は去年初秋、朝の那谷寺の、しっとり露を帯びた静寂清浄の境内を巡拝している間に、秋風を白しと言つた芭蕉の気持がおそろしく深い所にあつたことを切に感じたのであつた。

ところで越路以降は、『おくのほそ道』の、序破急でいえば急に当る部分で、帰路をいそぐ急ぎ足の趣を持つ。旅愁の表出はこのこととも関係していそうである。

一方、曾良の旅日記を読んでみると、一か月にわたる越路の旅は前半を中心に辛かつたようだ。荒寥たる自然の相観、見るべき名所も乏しく、冬の降雪・海荒れとは裏腹な夏の高温多湿にも苦しめられた。旅の疲れを医すべき知人も金沢以外にはいなかった。旅愁の強きざしたということもあつただろう。越路の旅愁は必ずしも文芸上の潤色というばかりでなく、実情・実感の体験に基づいている面もあつたと考えるべきかも知れない。